

口頭発表「動物園のモルモット貸出制度を利用した生活科での飼育活動」

増田 繁乃* 田宮 縁**



1 はじめに

本単元のねらいは、子どもが、モルモットを飼育することを通して、自分がお世話することがモルモットの生命を守ることに繋がるということに気付き、生き物を大切にしたり、相手の気持ちを考えて行動したりする大切さを実感するということでした。

方法としては、9月からモルモットの飼育をするを見据え、6月の段階で「日本平動物園」の飼育員と連携し、飼育員の「仕事内容」「仕事に対する思い」「動物に対する思い」などを学習しました。そして、夏休み明けの9月に日本平動物園の「モルモット貸出制度」を利用し、子どもが飼育員となり、教室で3匹のモルモットを飼育しました。

1 「動物園の飼育員さんについて調べよう」

この単元に入る前、国語の説明文教材「どうぶつ園のじゅうい」において「動物園の獣医の仕事内容」を学習しました。

その後、日本平動物園に見学に行き、様々な動物を見るとともに、動物園で毎日行われている「ゾウのトレーニング」を解説付きで見せてもらいました。「ゾウのトレーニング」とは、口の中の細菌のチェック、足の爪に病気がないかのチェックなど毎日の健康観察です。トレーニングの前には、ゾウの排せつ物の掃除、トレーニング後にはご褒美のエサがゾウに与えられます。

(1) 飼育員さんと獣医さんの違いは何？

トレーニングを見た子どもは、「トレーニングをしているのは、獣医さんなのか？それとも飼育員さんなのか？」という問いをもちました。



それは、子どもたちは「健康管理は、獣医さんの仕事、エサやりや排せつ物の処理は飼育員さんの仕事」だと思っていたにも関わらず、どちらも同じ人がやっていたからです。子どもの発言で印象的だったのが、「飼育員さんはお父さん・お母さんで、獣医さんはお医者さん。だから、ぼくたちが風邪を引いたらお薬を飲ませてくれるのはお母さんでしょ？でも、そのお薬をくれるのがお医者さん。だから、あの人は飼育員さんじゃないの？」という自分の生活に当てはめて考えることができていた発言でした。このように、問いをもった子どもたちは、そこから飼育員の姿に目を向けていきました。

「解決したい」「飼育員さんに直接話を聞きたい」という思いをもった子どもたちに私は飼



育員の山本さんに学校でお話をしていたいたり、子どもたちの質問に答えていただいたり

する時間を設定しました。子どもは、飼育員の仕事内容に加え、飼育員という仕事の魅力、仕事や動物に対する飼育員さんの思いと願いについて知ることができました。子どもは、自分が想像もしていなかった仕事を飼育員さんが行っていることや、予想以上に飼育員の仕事がたくさんあり、大変であるということに気付くことができました。

(2) なぜ、飼育員の山本さんは、飼育員の仕事が好きなの？

山本さんのお話を聞く中で、子どもからは新たな問いが生まれました。それは山本さんが「飼育員の仕事が好きです」とおっしゃったことがきっかけでした。「あんなに大変な仕事をしているのに、何で山本さんは仕事が好きなんだろう？」「ウンチの掃除とか、汚い仕事もあるのに、何で仕事が好きと言えるのか？」というものでした。そこで、私は山本さんにインタビューに行き、その様子を撮影したビデオを子どもたちに見せました。「動物が好き」「お客さんに楽しんでもらうとうれしい」「動物を増やすという自分の夢が叶えられる」という山本さんの答えに、子どもたちは納得している様子でした。また、このインタビューで私は、山本さんに「動物園に来る人をお願いしたいことは何ですか？」と聞きました。すると、「自分がされて嫌なことを動物にしないでほしい」と答えてくれました。この言葉は、この後に続くモルモットの飼育の学習の際、子どもたちの目標であり、ずっと心に残る言葉でした。

2 「ぼく・わたしはモルモットの飼育員」

(1) モルモットの飼育員になってみたい？

本単元の導入でも飼育員の山本さんにご協力いただき、山本さんからのお手紙を読むところから始まりました。その内容は「日本平動物園では、モルモットの貸し出しを行っているこ



と」「モルモットの飼育員をやってみないか？」というものでした。手紙を読んだ子どもは目を輝かせ、すぐに「やりたい！」と言いました。しかし、その一方で「やりたいけど、死なせちゃったらどうしよう？」「モルモットのこと、よくわからない。それなのに、お世話ができるのか心配」「もっとちゃんと調べてみたい」という発言もありました。そこで、市立図書館から借りて来た本を使い「エサ」「掃除の仕方」「家（ケージ）の環境」「性格」「体の特徴」など様々なことを調べた上で、日本平動物園に行き、モルモットを貸していただきました。



(2) 名前をつけたい

モルモットを連れて帰ってくるとすぐに「名前をつけたい！」という声が挙がり、名前決めの話し合いが行われました。

「性別がわからないから、もし、男の子だったら、その名前はかわいそうじゃない？」「でも、男の子でもあだ名で“ちゃん”を付けて呼ばれ



ている子もいるから、いいんじゃない？」など様々な意見を出し合い、性別、見た目などを子どもたちなりに考え「モット、モル、ミッちゃん」と決めました。

(3) 飼育当番を決めたい

名前が決まると、子どもからは「飼育当番を決めよう」という声が挙がりました。

- a 番号順で回す. 1匹のモルモットに対して2人の飼育員が担当する.
- b 席の班で回す. 1匹のモルモットに対し, 1つの班(5~6人)が担当する.
- c 席の班で回す. 3匹のモルモットに対し, 1つの班(1匹当たり1~2人)が担当する.

話し合いの中で, 最初に出てきたのは「bは, 人数が多くなるから喧嘩になって, うるさくなり, モルモットにストレスを与える. かわいそう.」という意見でした. そのため, 1匹のモルモットに対して少ない人数が担当する a か c になったが, c の場合, 5人の班は, 1人でやらなければならない子が, 大変だから, a が一番いいという結論になりました. 飼育当番を決めるだけでも, 1時間の話し合いを行ったが, どの子どもにも「モルモットのために一番いい方法をとりたい」という共通の思いがありました.

決め手になったのは「当番の人数が多いと, ケンカになったりうるさくなったりして臆病なモルモットがかわいそう」だという考えでした. 子どもたちはすでに「モルモットの気持ち, モルモットの立場」を考えることができていました.



(4) 飼育日誌をつけたい

子どもからは「飼育日誌をつけたい」という声も挙がりました. それは, 飼育員の山本さんが「飼育員は, 飼育日誌をつけている」というお話をしてくださったからです. この飼育日誌をつけることで, 子どもはモルモットの観察をよくしていました. 糞の数, 糞がある場所, 何の野菜が好物か, ケージの中でもよくいる場所など, モルモットに関する様々な気付きを得ていきました.



(5) モルモットのことを他の人に伝えたい

モルモットについて様々な気付きを得た子どもは, 「モルモットのことを他の人に伝えたい」という思いをもちました. そこで, 研究協議会に来てくださった参観者や参観会に来た保護者, そして, 1年生と合計3回の「2年1組ふれあい動物園」を開催し, モルモットのことを紹介したり, モルモットに触れ合ってもらったりしました. 子どもは, お客さんに喜んでもらったことと自分たちが飼育員の仕事をがんばっているから, こんなふうに紹介ができたんだということに喜びを感じ, 自信をもつことができました.

(6) 土日のモルモットのホームステイ

飼育員の仕事を始めてから1ヶ月が経った頃, 子どもから「土日のお世話はどうしているの?」「土日もお世話をしたい」という声が挙がりました. そこで, 保護者にも依頼し, 希望者を募り「土日のモルモットホームステイ」を合計4回行いました. 保護者からも「貴重な経験をさせてもらった. 私の方が楽しんじやいました」というありがたい言葉もいただきました.

(7) お別れ会を開こう

モルモットとのお別れが近づいてきたころ, 子どもたちからは「モルモットのお別れ会をしたい!」という声が挙がりました. 話し合った結果「モルモットへの手紙の朗読」「好きな野菜のプレゼント」「最後のふれ合いタイム」などの活動を行うことに決まり, 子どもたちは3匹のモルモットとの最後の時間を思う存分楽しんでいました. しかし, 本当のお別れの際には, 涙をこらえきれず泣き出してしまい, 迎え

に来た飼育員さんの車を最後まで手を振って見送る子どもたちの姿が見られました。



3 動物園と連携することで

このように動物園と連携した単元を組むことで以下にある様々な効果が得られました。

- 抱いて温かみのある動物が学校でも簡単に飼うことができ、昆虫やザリガニでは味わうことができない生命の温もりが実感できるということです。そのため子どもには「大事にしたい」「命を守らなければ」という思いが必然的に生まれました。
- 飼育員の話や直接話しかけることができるため「本物を味わう」ことができるという点です。本物の飼育員さんと関わったことで、子どもにとって飼育員が身近な存在であり、お手本や目標でした。困ったときやわからないことがあった時もFAXですぐに答えてくださり、専門家の知識を頼ることができたり、飼育員から聞いた言葉を参考に飼育の仕事をしたがる子どもの姿が見られました。
- 動物園にとっては、子どもと保護者の動物園への愛着を醸成することができたと考えます。この2つの単元の学習をしている間にも、クラスの子どもたちは休みの日に何度も動物園に行っていました。一人で5回以上行っ

ている子もいました。動物園が子どもにとって身近な存在になっていったと考えます。

私自身、動物の飼育の学習を行うのは初めてでしたが、モルモットの可愛らしさ、そして、子どもたちがモルモットの飼育にのめりこんでいく姿を見て、本当にやってよかったと思っています。学校で生き物を飼うことが難しい世の中になってきてはいますが、動物園と連携することによって、とても魅力的な単元を組むことができました。

【付記】

本報告は、「生活科における動物園との連携による動物飼育」(科学研究費基盤研究(C))において、静岡市立日本平動物園と静岡大学教育学部附属静岡小学校の協力のもと、小学校に「モルモットとケージの貸出」と「モデル指導計画」を提示、その実践の効果を検証したものである。2011年度より、モルモット(妊娠個体)貸出(2校)、モルモット(未妊娠個体)の貸出(2校)とパイロットスタディを行い、2013年度には日本動物園水族館協会加盟86園へのアンケートも実施した。また、上越市立高志小学校、旭山動物園、到津の森動物公園、北九州市獣医師会、北九州市教育委員会、北九州市内小学校2校に、参観やヒアリング調査をさせていただいた。このような協力のもと、「期限付きモルモット貸出事業」は、2015年度より日本平動物園のホームページに掲載され運用されている。しかし、事業は動き出したばかりで課題もあり、学校、動物園の双方にとってよいシステムとなるように改善していく必要がある。また、本事業では、静岡市獣医師会の学校飼育動物支援の対象としていただいているということを加えておきたい。

(*吉田町立中央小学校)

(**静岡大学)